

1 次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

1 富士山にはこれまで三度ばかり登頂した。一度目は大学時代に、私が所属していたクラブの先輩が雪山訓練を行うというので、それに参加したときのことだ。その日は五月の天気の良い日で、途中でテントで一泊し、滑落したときにピッケルを使って停止するための訓練やアイゼンの歩行訓練などを学んで、ひざしで溶けてクサったザラメ雪の斜面をグサグサと音を立てながら下山した。広大な斜面を颯爽と滑り降りるスキーヤーの姿がまぶしかつたことを覚えている。二度目は登山というよりも、半分取材だった。数年前から富士登山者が急増しているという話を頻繁に耳にするようになり、どんな状況になっているのか確かめてやろうと思ったのだ。(中略)

2 三度目は二〇一三年の冬のことだ。十一月に突然、熱病のように雪山に行きたくてたまらなくなり、友人を誘って日帰りで登ってきた。冬の富士山は初めてだったが、風が強く気温が低いので、それだけで体力が奪われた。このときは時間切れで登頂を断念した登山者も何人かいたようで、夏とはちがって非常に登り応えのある、いい山だったという印象が残っている。登山として心に残っているのは「A」三度目の冬富士で、日帰りであれだけどっしりとした手応えを感じられる山はなかなかないので、時間が許せば今季も初冬の時期に登りに行きたいと思っている。だが、対象に関する興味という点では夏の混

雑した富士山にはかなわない。このときに私が登頂したのは、バスの時間の関係で、最も混雑する日の出の時間ではなく午後の早い時間帯だったが、それでも頂上付近では三十分ほどのプチ渋滞が発生していたし、頂上に出ると数えきれないほどの群集が手を振ってはしゃいだり、大声で盛り上がったりにして、そこにはどこか秋の日の運動会か、休日の郊外のショッピングモールのような、のんびりとした平和な雰囲気を感じられた。(中略)

3 要するに、現在の富士山には世間があるのである。これまで私は山というのは特殊な世界だと思っていた。山と世間はいろいろな意味で対極的な関係にある。昔の登山者のなかには山の下の人間社会のことを「下界」と呼ぶ人が多く、その下界という言い方が、私にはなんだか山を特別視するようなニュアンスが感じられて嫌いだっただが、しかし、今考えると山と世間を分けて捉える彼らの見方には、たしかに一理あったのかもしれない。本来の登山には、世間や日常から非日常に足を踏み入れるという、単なるスポーツの範疇をこえた意味がある。山に登ることは、日常から一時的に離脱することだ。昔の登山者が反社会や無頼を気取ったような雰囲気をもとっていたのは、そのためである。ところが夏の富士山にはそうした日常からの離脱といった空気は一切流れていない。むしろ、そこにあるのは日常の延長そのものである。いったいこれは何を意味しているのだろう。

4 富士山が世界文化遺産に登録されたことに伴って、二〇一四年六月、

弾丸登山を自粛する呼びかけや入山料の本格的な徴収が始まったとのニュースを新聞で読んだが、こうした一連の努力は、そのよしあしはともかく、登山の本来の姿からはかけ離れた、きわめて「非登山的」な試みであるという点で興味深かった。もともと山とは、人間にとつては荒々しい自然の象徴である。自然とは人間が生活する社会や文明の外側にのびる広大な領域のことであり、そこには人間の制御やコントロールがきかない恐ろしい世界がひろがっている。文明社会とは人間が決めた規則や人間自身に管理された内側の世界のことをさすので、文明にとどまりさえすれば人間は人間自身で主導権を握って暮らすことができるのだが、しかしひとたび文明社会から離れて自然のなかに足を踏み入れると、そこでは人間は生きる主導権を完全に自然に握られるので、いつなんどき死が訪れるかわからない不安定な状況下で生きのびなければならない。山というのはそうした自然の混沌を最も劇的に体験できる現場であり、その山に登る登山という行為は、人間が主導権を握って生きることのできる枠組み（＝人間界）の外側に飛びだして、未知の世界を経験するためにあえて実践される特殊な作法のことだと理解してよい。（中略）

5 また、山は人間界の外の、社会の管理の及ばない場所にあるのだから、そこを目指す登山もまた、社会の束縛の及ばない自由な行為であるはずだ。もちろん社会の管理から自主的に離脱する以上、登山者は原則的に他人の力は一切あてにできず、必ず自分の力で登って戻って

こななければならない。山に登る以上は完全に自分の責任のもとに判断を下し、その判断にもとづいて行動を組み立て、結果的にその判断が誤りだったときはダイレクトに自分の命に跳ね返ってくる。つまり、

他者と切り離されているので束縛はないのだが、その分、自分の裁量で命を管理しなければならないのが、登山における自由なのだ。登山の自由とは、ふだんわれわれが自由と聞いてイメージするような「好き勝手ができて居心地がいい状態」とは正反対の位置にある、きわめて苦しくてシビアなものである。しかし、それがどれだけ苦しくても、自由と自力は登山を語るうえで欠かせないキーワードである。

自由をまったく感じることでできない登山は、たとえ山に登っていても登山とは呼べない。私はさきほど山というのは世間と対極的な関係にあると書いたが、それは登山が社会の枠組みの外側で、自らの責任において展開される自由な行為であるという意味である。登山とは厳密にいうと「自由＝自力＝自己責任」の原則が適用されている行為のことであり、単に歩いて山頂に立てばいいというものではない。

6 ところが、弾丸登山の自粛呼びかけや入山料の徴収が本格的に行われている現在の富士山では、こうした自由や自力、自己責任といった登山の原則からは大きくかけ離れた状況が現出している。弾丸登山というのは夜を徹して富士山に登ることのようであるが、それがたとえばどのような登り方であれ、人によって体力がある人もいればない人もいるのだから登る速度や登り方が変わるのは当たり前だし、それ以前

にどのような登り方をしようとそれは当人の自由なわけで、そんなことを他人からとやかく言われる筋合いは本来はないはずだ。だが、現実として今の富士山はこうした不自由な規則を運用しなければならぬ状況になっている。それは富士山という山が「B」人間界の外側の荒々しい自然に屹立する未知なる存在ではなく、人間社会の枠組みの内側にある単なる地形上のでっぱりに変質してしまったからである。だから夏の富士山に登っても、それは厳密な意味での登山ではなく、管理された世界の内側で行われる、山を舞台にした単なる運動行為にすぎないということになる。

(角幡唯介『旅人の表現術』による)

(注) ○ 1 6 は段落符号である。

- ピッケル 〓 つえの先に金具がついた、氷雪の上に足場を作るときや体を支えるときに用いる登山用具。
- アイゼン 〓 登山靴の底に取り付ける滑り止めの金具。
- クサったザラメ雪 〓 ここでは、日中に溶けた雪が日没後に再び凍結し、それが繰り返されてできる積雪のこと。
- 颯爽と 〓 見た目にさわやかで勇ましいさま。
- ショッピングモール 〓 多くの小売店が集まった大規模な複合商業施設。
- ニュアンス 〓 微妙な意味合い。

○ 範疇 〓 同じ種類のものが全て含まれる領域。

○ 無頼 〓 無法な行いをする事。

○ 混沌 〓 区別がつかず、入り混じっている状態。

○ ダイレクトに 〓 直接であるさま。

○ シビアな 〓 厳しいさま。

○ 屹立 〓 高くそびえ立つこと。

2 次の問1、問2の問いに答えなさい。

問1 次の文中の傍線部のカタカナに適した感じを、

あとのアからエまでの中から選びなさい。

彼は自らつくった劇団をヒキいて公演を行った。

問2 次の文中の「」にあてはまる最も適切なことばを、

あとのアからエまでの中から選びなさい。

叔父は温厚「」な人柄で、誰からも慕われている。

ア 折衷 イ 儉約 ウ 一遇 エ 篤実

3

次の文章を読んで、あとの問1から問5までの問いに答えなさい。

1

私がりなりわいとしている文化人類学は、フィールドと呼ばれる調査地に出かけてゆき、そこに長期間住み込んで、人びとの暮らしについて調査をするという学問だ。人びとの暮らしや考えていることを理解するためには、その土地の言葉ができなくてはならない。少なからぬ人類学者は、日本であらかじめ調査地の言語を勉強してから調査に出かけるのではなく、とりあえずフィールドに入り、そこで暮らしながら少しずつ言葉を学んでいく。私自身もそんなふうにして、これまでタンザニアやガーナ、南インドで調査を行ってきた。

2

大学院に在籍していた頃、同じく人類学者の卵としてモンゴル研究をしていた友人と、①「日本で思わず現地語が出てきちゃうケース」について語りあったことがあった。モンゴル語では、「ハッ」と息を吸い込むあいづちがあるらしく、彼女は日本語で会話をしている最中にも、思わず「ハッ」ってやつちゃうことがあるという。私も同じく、舌で口蓋を「タツ」と軽く打つあいづちがひょっこり出てしまうことがある。驚いたときの「エイ！」といった間投詞も、現地語が思わず出ちゃうケースに含まれる。日本語で話しているにもかかわらず、なぜそんな表現が飛び出してしまうのか。それは、それらが言語というよりも声、もつといえば身ぶりに近い表現であって、だからこそフィー

3

ルドに滞在しているうちに、人類学者の身体に深く染み込んで離れないものになるからではないだろうか。ある土地に暮らしながら言葉を学んでいくとき、言葉は常に声であり、身ぶりであり、やりとりの中にある。それをまるごと学んでいくことは、人びとの声音や身ぶり、やりとりの作法を学ぶことだ。そのとき、「学ぶ」ことはまさに「まねる」ことであり、身体的な行為にほかならない。だから長期の調査から戻って間もなく、頭では日本にいとわかつていても、身体はまだフィールドの感覚のままであるとき、とっさに出てくる間投詞が現地語になってしまうのだろう。（中略）

②

ガーナの村に住んでいた頃、よく耳にするにもかかわらず、意味のわからない単語があった。ある日、近所の子どもと一緒に幹線道路の端を歩いていたら、ミニバスが私たちの横すれすれを猛スピードで追いかけていき、②ことがあった。そのとき、その子がすかさずバスに向かって拳を振り上げ「クワッシア！」と叫んだのを見て、私は悟った。クワッシア＝バカだったのか。そんなふうには、ある状況の中で発せられる言葉を、声音や身ぶりや表情と一緒に全身でまねて／学んでいるうちに、だんだんと自分の思考や独り言や夢の一部が現地語のそれになってくる。それは、単に語彙が増えた、文法がわかってきた、という以上に、自分の身体感覚、ひいては身のまわりの世界や他者との関わり方が少しずつ変化していることを感じる段階だ。ある言語が「自分のものになっていく」という感覚をもつとき、同時に私

はその言語の語彙や、リズムや、やりとりが生み出しつづける独特な世界の網の目の中に少しづつ取り込まれている。

4 雪の多い土地で、雪を表現する語彙が豊富だというのは有名な話だけれど、私はガーナで暮らすうちに、さまざまな儀礼や霊的存在に関する語彙の豊かさを知ることになった。私自身の研究テーマがそうした土着の宗教実践だということにもよるが、英語や日本語には簡単に翻訳できない、豊かで多義的な語彙を学び、同時に儀礼や呪術の実践にふれるうちに、私はいつのまにか呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめている自分に気づいた。ガーナの村で、「オボソン」と呼ばれる精霊について語りあうことは、外側からそうした「お話」の世界を観察することではなくて、精霊や呪術師が躍動している現実世界に全身で参入し、その世界を生きることでもある。それは、英文和訳のように、異文化の言葉や概念が自文化の言葉や概念にスムーズに置き換えられることを前提とした言語の学習とは異なり、^⑤自分の身体感覚や世界認識そのものが揺らぎ、不安定化していくような経験だ。だから、人類学のフィールドワークは楽しくもあり、ときに非常に疲れる体験でもある。

5 人類学者のタラル・アサドは、「文化の翻訳」をテーマとした論文の中で次のように書いている。人類学者が調査地の言語を母国語に翻訳しようとするとき、彼／彼女は一組の文と文を対応させるような機械的な翻訳を行うのではない。あるいはまた、現地の人たちの語りが常

に論理的にみえるように、都合のよい解釈を施しているのでもない。むしろそれは、フィールドでの生活を通して異なる言語や思考のあり方を学び、それを自国の人びとに伝えようと試みる中で、人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるような翻訳なのである、と。

6 言葉は何よりもまず声であり、リズムであり、やりとりであるのだから、それを学ぶには全身で他者や世界と関わり、とつくみあわなくてはならない。その過程で、私は言語を自分のものにしていくと同時に、その語彙や身ぶり、リズムが織りなす世界に取り込まれていく。私の身体はそのとき、母国語と現地語を媒介するものになる。現地語の世界に没入し、そこに生きる「私」に変身しながら、母国語でフィールドノートをつけるとき、そこには常に「没入（変身すること）」と「再帰（我に帰ること）」の往復運動がある。そんなふうに没入と再帰をくりかえしていくうちに、自分自身がしだいに根底から変容してゆき、ついにはどちらが「我」で、どちらが「変身」なのかもわからなくなってくる。日本に戻って、日本人の学生としてふるまっているつもりでも、思わず口から飛び出す「ハッ」というあいづちとともに、長く暮らしたフィールドでの「私」がふいによりがえってくることもあるのだ。からだ全体を使つて、身ぶりやリズム、やりとりとしての言葉を身につけることは、常に変わらないこの私が異文化の言語を知り、理解し、習得する、といった一方的なプロセスではない。そうではなくて、それは変身の経験、別な世界に生きる「私」の生成である

と同時に、その世界によって私が少しずつ知られ、のっとられていくような経験でもあるのだろう。

『わたしの外国語漂流記 未知なる言葉と格闘した25人の物語』所収

石井美保「あいづちと変身」による

(注) ○ 1 6 は段落符号である。

○ なりわい 生活をしていくための仕事。

○ 人類学者 文化人類学を研究している人。

○ タンザニア、ガーナ ともにアフリカ大陸にある国。

○ 口蓋 口の中の上側の部分。

○ 間投詞 ことばの間や切れ目に入れて用いられることば。

○ / ここでは、「又は」の意味で用いられている記号。

○ 呪術 超自然的、神秘的なものの力を借りて、望む事柄を起こさせる行為。

○ フィールドワーク 野外などの現場や現地で行う調査・研究。

○ タラル・アサド サウジアラビア出身の人類学者。

○ フィールドノート フィールドワークの記録。

○ プロセス 過程。

4

次の古文を読んで、あとの問1から問4までの問いに答えなさい。
(本文の……の左側は現代語訳です。)

もろこしに道林禪師といへる人は、この世のあまりにはかなきことに
中国……

堪へわびて、木の末にのみ住み侍りしを、白樂天見侍りて、^①鳥の巢の禪
耐えられなくな
つて

師などと名付けて、「和尚の栖あまりに危ふく見えて侍る物かな」と

云へば、和尚答ふ、「汝がこの世を忘れて交はり暮らすこそ^②猶危ふけ
る所
お前

れ」と云へり。また、樂天問ふ、「いかなるかこれ仏法」と。和尚答ふ、

「諸惡莫作諸善奉行」。樂天云ふ、「このことわりは、三歳の嬰兒も
もろもろの惡を行ふな
もろもろの善を行え
道理……
幼い子

知れり」。和尚云はく、「知れることは、三歳の嬰兒も知れり。行ずる

ことは、八旬の老翁もまどへり」と云へれば、^③白樂天三礼して去れり。

八十歳

『ひとしと』による

(注)

○ 道林禪師だうりんぜんじ 唐代の僧。

○ 白樂天はくらくてん 唐代の詩人・官吏。

○ 和尚くわしやう 修行を積んだ僧。